

「ここにはいない、復活した」 2019年4月21日 礼拝メッセージ

『そして、週の初めの日の明け方早く、準備しておいた香料を持って墓に行った。2 見ると、石が墓のわきに転がしてあり、3 中に入っても、主イエスの遺体が見当たらなかった。4 そのため途方に暮れていると、輝く衣を着た二人の人がそばに現れた。5 婦人たちが恐れて地に顔を伏せると、二人は言った。「なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか。6 あの方は、ここにはおられない。復活なさったのだ。まだガリラヤにおられたころ、お話しになったことを思い出さない。7 人の子は必ず、罪人の手に渡され、十字架につけられ、三日目に復活することになっている、と言われたではないか。」8 そこで、婦人たちはイエスの言葉を思い出した。9 そして、墓から帰って、十一人とほかの人皆に一部始終を知らせた。10 それは、マグダラのマリア、ヨハナ、ヤコブの母マリア、そして一緒にいた他の婦人たちであった。婦人たちはこれらのことを使徒たちに話したが、11 使徒たちは、この話がたわ言のように思われたので、婦人たちを信じなかった。12 しかし、ペトロは立ち上がって墓へ走り、身をかがめて中をのぞくと、亜麻布しかなかったので、この出来事に驚きながら家に帰った。』（ルカによる福音書24章1-12節）

イエスさまが十字架に架けられて死亡した後、3日目に弟子の婦人たちが墓に行ってみますと、そこにイエスさまはおりませんでした。そのかわりに、そこにいた輝く衣を着た2人の人物がこう言います。「なぜ、生きておられる方を、死者の中に探すのか。この墓の中などにはいない。復活しているのだ。」そしてこうも言います。「まだ、ガリラヤにいた頃にイエスさまがお話になっていたことを、しっかり思い出してみなさい。」

ガリラヤというのは、男女の弟子たちがイエスさまと最初に出会って一緒に活動していたところです。そのガリラヤから、このイエスさまが十字架に付けられたエルサレムまで弟子たちは一緒に旅を続けてきましたが、その道中、様々なことをイエスさまから学んで参りました。その中の一つで、イエスさまの教えの根幹となるものが、この死者の中から人が復活するという教えであります。この復活するということの教えは、イエスさまのお話しされる様々な教えを理解するために大変重要なものです。これがなかったら、そもそもイエスさまの教え全体が成立しないというものでした。弟子たちは、言ってみれば、イエスさまの死ということをして、その復活について実践的に、今、学ぶ機会に遭遇しているのだというわけです。イエスさまの死を、この復活への信仰によって乗り越えることで初めて、イエスさまの教え全体を真に受け取ることが出来るのだというわけです。

その死者の中から復活するということですが、そのことを端的にわかりやすく説明しているところが新約聖書の中にあります。これは葬儀の時に良く教会では用いられるところです

が、ヨハネの黙示録というところの 21 章となります。そこでは、今日の聖書箇所を輝く衣を着た人たちのような天的な存在が、宇宙の神秘を開示してその秘密を打ち明けてくれます。「見よ、神の幕屋が人の間にあって、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のもものは過ぎ去ったからである。」

ここにあるように、私たちはいずれこの地上の生涯を終えた時、神と共に住む所に引き上げられます。そこには、この地上で経験したすべての労苦から解放され、悲しみの涙を流すことがなくなります。死という最大の心配事もなくなるので、心の中は平安になり素直に神さまの御心に従い、すべてのものを受け入れる和解の 때가訪れます。その場所は、他者と争うことが必要なくなるので、すべては神の御心のままに、愛がすべてを支配する完全な世界に永遠に住むことになるのです。

この至福の世界に復活することを信じるのが、この地上で様々な困難から救われるための秘訣があるのだということですね。そのことを、うまく言っておられるなどと思った例を挙げたいと思います。俳優の樹木希林さんが、今年の 9 月に亡くなりました。晩年を樹木希林さんは、全身ガンを患って死を前にして生きておられました。その時考えられていたことを、講演で語っておられたのを私は少し聴きました。次のようなことを、おっしゃっていました。「自分がしたように、皆さんも、あちらの世界(死後の世界)に行ったことを想像して見てください。そして、あちらに行ったつもりで、そこからこちらの世界を覗いて欲しい。すると、今、私たちが一生懸命になっていることが、そんなに大切なことではないことに気がつくはず。地位を得たり、それを維持すること。名誉を得たり、お金を沢山稼ぐこと。それらがすべて人にとっては、どうでもよいことに思えてきます。自分は病気になって、そのことに気がつくことが出来てすごく得をしました。」

これは、人間が抱えている私たちに苦しめている労苦というのは、実はどうでも良いことがほとんどなのではないかということをおっしゃっているのだと思われます。そのどうでも良いことに捕らわれてしまい、本当に大切なことを見失っているという指摘が、とても当たっているなど私には思えました。あちらの世界に行ったら、どうせ失ってしまうものに人生の大半を奪われてしまうのは本当にもったいないです。あちらの世界に持って行けるのは、何かとさえ、それは記憶だけです。もうこの先長くないと悟ったとき、いかにその短い残された時間を自分が本当にやりたいことのために使うのかを考えるわけです。そのことの方を大切にして、少しでもあちらの世界に持って行く記憶を、すてきなものにするものを選ぶのです。命の量を増やす生き方から、命の質の方を良くするという生き方への転換が起こるのだということでもあります。

イエスさまが、ガリラヤにおられる頃から人々にお話しされて来たのは、この未来に行くことになる神の国に意識を移すことによって、自分にとって一番大切なことのために生きることが

できるようになることでした。そして、そのことで本当は負わなくても良い、無駄な労苦から解放されて、自由になりましょうということでした。どちらでも良いこと、あるいは本当はどうでもよいことに、いかに私たちは捕らわれてしまっているでありましょうか。人から良く思われたいとか、尊敬されたい、馬鹿にされたくないといった、他よりも劣った者として見られたくないという感情に、振り回されていないでしょうか。しかし、本当の意味で、自分が一番惨めに感じるのは、他の人の目ではなく、自分自身で納得出来ない時だと思います。もし、本当に、自分が一番大切だと信じたことに、イエスさまはそれを愛に生きることだと言いますが、そこで自分のできることをすべてやったのなら後悔はないと思います。終わりの時を迎えて、あちらの永遠に続く世界に持って行くのは、そのような自分の人生に納得することができたという記憶でありたいと思います。

終わりの日の復活を信じ、永遠の命に生きようになることに、より希望を見い出すことが早かった人々が、今日の聖書箇所に記載されています。それは誰だったかと言いますと、女性の弟子たちでした。ペトロという男性の弟子が有名であります。ガリラヤから最初にイエスさまに従ったのもペトロが一番先でした。しかし、それよりも先に、ここでイエスさまの死者の中からの復活を信じたのが、女性の弟子たちだったのです。

当時の手紙が少なからず残っていますが、その中にこのようなものがあります。出産を控えている妻を持った夫に宛てられた手紙で、そこには女の子が生まれると捨ててしまわないという記述があります。理由としては、家を継がない女子を育てる余裕があなたにはないはずだから、無理をすることは無いという当時の常識ではその夫を思いやった言葉が記してあったのです(女子を遺棄することは当時は合法)。このことから、女性は生まれたときから、いかに死と隣り合わせで生きて行かなければならなかったのかがわかんと思います。男性よりも劣っていると軽く見られ、実際に命の重さが天秤で量られていたのです。

イエスさまの死者の中からの復活を、最初に信じた女性の中にマグダラのマリアという人物がいます。4つの福音書すべてで復活したイエスさまの聖書箇所に出てくる人物は、このマリアだけです。イエスさまの母親のマリアでさえも、それはありませんでした。ヨハネによる福音書に関して言えば、復活したイエスさまと出会ったのは、このマグダラのマリアだけとなっています。この女性は、イエスさまに7つの悪霊を追い出してもらったとのだと聖書には記してあります。悪霊につかれた人物として、ものが言えなくなったり、所かまわず地面に引き倒されたり、火の中や水の中に飛び込むといったことが、ずっと子どもの頃から続いてきた様子が聖書には記されています。また、昼夜かまわず暴れ回るために誰も手に負えなくなって、墓場に鉄の鎖で縛られている人物も聖書には出てきます。そのような悪霊が、7つも取り憑いていたマリアです。彼女がどんなに重くて悲しい人生を歩んで来たのかが、想像できると思います。

イエスさまと出会うまでの闇が大きければ大きいほど、イエスさまがもたらす真理の光が、

彼女にとって大変まぶしく輝いていたのですね。死者の中から復活することへの希望が、女性の弟子たちに、そしてこのマグダラのマリアにおいて最初に起こったことは、多くの重荷を負った人々にとって、大きな慰めとなると思われます。今、この地上で、闇が覆い尽くしているその場所に置かれている人々は、最もイエス・キリストによって慰められ、生きる希望を与えられるところにいるのです。

死者の中から復活することへの信仰は、今も変わらず、私たち人間の暗闇に光りをもたらしてくれます。闇が濃いところであればあるほど、このキリストの復活の光りは輝き出すのです。このことを、このイースターの時に、ともに聖書から聞くことが出来ればと願います。